

---

if...

永遠 愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

if...

### 【著者】

N4885D

### 【作者名】

永遠 愛

### 【あらすじ】

「もしあああだつたら」「もしーひつだつたら」「もしこうだつたら」…そんな滑稽なことを何度も考えたのだろう。

## (前書き)

初 作品です（ 、 ）駄文&#8226;駄作ですが、アドバイス・感想など頂けると嬉しいです

制服に身を包み、“金子”と書かれた家のチャイムを押した。

朝。

「紗良！俺、今日学校行かねえからー。」

もしも…

もし、幼なじみじゃなければ…

もし、あんなに近くにいなければ…

【if...】

そして、出てきた男からの「お前葉。

男は、寝起きでボサボサの髪、スエット姿でそいつにいた。

「…あた？」

男は、ダルそうに頭を搔きながら続ける。

「おー、だつてこれから里山来るし」

「そ…つか」

“里山”

「お前は、いつもあたしを苦しめさせな。

「お前は学校行くんだろ？ 気に付けてな」

男は、ヒラヒラと手を振りながら、家の中へと入つていった。

あたしは、頭が働かないまま歩きだす。

あの男… 金子悠はあたしの幼なじみ。

もつ…何年になるのかな。

少なくとも、出会つてから15年以上は経つてことねと想つ。

昔は、いつも一緒にいた。

一緒に登下校や、部屋の行き来なんて毎日だった。

だけど、最近変わってしまった。

高校に上がったのと同時に母親を亡くし、それ以来学校に行かなくなつた。

…学校だけじゃない。

部屋からも、必要最低限しか出なくなつた。

毎日毎日、“亜弓”とこの2女と部屋で会つだけ。

亜弓は、悠の母親が亡くなり、悠が荒れていた時にナンパした女の子。

金髪のショートの髪、露出度の高い服、語尾を伸ばす話し方。

言い方は悪いかもしねないが、軽そうな女の子だ。

…いや、

「軽そう」じゃない。

「軽い」んだ。

亜弓は、この街で一番有名なナンパスポットで、いつもナンパ待ちをしてくる。

あたしの男友達の中にも、亜弓ナンパし、一夜を共に過ごした事がある奴がいる。

あたしは、亜弓をよく思つていない。

なぜなら、あたしは悠が好きだからだ。

もうずっと前から…、きっと幼稚園の頃から。

だけど、悠への想いが許される事はない…。

あれは、1年前 …

『紗良ー・紗良ー』

ある夏の夕方。

突然、玄関を叩く音と、叫ぶ悠の声が聞こえた。

『どうしたの?』

なぜ悠がこんなに焦つているのかわからないあたしは、冷静に玄関のドアを開けた。

『…え』

開けたと同時に、言葉を失つた。

初めて悠の涙を見たのだ。

『……つ』

顔を真っ赤にし、泣き続ける悠。

『……悠？ ねえ、どうしたの！？』

嫌な予感がし、つい声を荒げてしまつ。

悠は何も答えない。

『悠？ ねえ悠！』

『……んでた』

蚊のなくよくな小さな声。

それでも、この時あたしには十分大きな声に聞こえた。

“母さんが死んでた”

悠は、そつぱつきつと口にしていた。『……どうして……』

頭が真っ白になつた。

死んで死んだの？

交通事故？  
通り魔？

最悪な状況を頭の中で思い浮かべる中、ふと『気がついた事があった。

“死んでた”？

死んでたって事は…

『…睡眠薬が床に散らばったまま…』

そうだ、悠は…

その日で、母の死を見てしまったのだ。

悠は、本当にかすかに聞こえる「り」との声で話し始めた。

いつも通り帰宅すると、リビングで母が倒れていた…と。

脈をはかり、救急車を呼ぼうとしたが、すでに息を引き取っていた  
そうだ。

睡眠薬を飲んだ。

…つまり自殺。

『び…し…？なんでおばさんか…つ…』

あたしは涙に濡れながら呟く。

『…これ』

悠は、一冊のノートをあたしに手渡した。

あたしは、渡されたノートに書かれた文字を読み進めていく。

『ひやひ、おばさんのが死ぬ間際に書いた口記のよつだつた。

…セレニティ、悠の父…おじいさんは死んだ、おばさんとの痛々しい心情が書いてあった。

『どうしたらいいの

わからない

早く私を愛して欲しい』

『どうか戻つて来て

戻つて来てくれるなり

私何も望まないわ

どうか戻つて来て

戻つて来てくれるなり

私全てを許すわ』

…何ページにも渡つて、詩のよつておじいさんの想いが綴られていく

た。

そして、ある詩を見た時…

あたしは絶句した。

『わかつてゐるよ

あなたは昔からいつも

隣の家に行きたがつてた』

…隣の家？

まさか…

『…俺の親父と紗良の母親…『キテたらしい』

悠からのその言葉に、耳を疑つた。

確かに、家族ぐるみの付き合いは多かつたけど…。

あたしの両親は、あたしが10歳の時に離婚した。

今は、父親と二人暮しだ。

当時あたしは何もわからなかつたが、父親は…気付いていたのか  
もしれない。

『だ……って、あたしの母親離婚してるし……今仙台で住んでるんだよ！』

あたし達が住んでいるのは長崎。

母は離婚した時に、実家のある仙台へ行った。

もしやうだとしたら、かなりの遠距離恋愛になる。

『…親父さ、最近よく出張だ、って家帰んなかったんだよな…疑いもしなかった…』

…お互いに、かける言葉すら見つからなかつた。

…あの後、悠は父親と縁を切り、小さなアパートに暮りし始めた。

悠の父親も…仙台へと引っ越ししたようだつた。

あたし達親子も、あの場所に住んでいられるはずがなく、学校の近くのマンションへ引っ越しした。

あれから1年が経つ。

長いよつで、短い一年が。

許されないことかもしれないけれど、あたしはまだ悠が好きで仕方ない。

想いは届かないけれど、傍にいたい一心で：

こうやって、毎朝悠のアパートに寄るのが田舎になっていた。

ピンポーン…

学校が終わると、あたしは授業のノートや課題を持って悠のアパートに来た。

「ゆーう? いないのー?」

チャイムを鳴らしても、大声で呼んでも出ない。

しかし、ドアは開いていた。

「ゆーう? 入るよー?」

あたしは、返事が無い事を不思議に思いながらも、ドアを開け、中に入る。

玄関には、ヒールの高いパンプスが置いてあった。

頭の中が空になる。

しづかへ立かぬへしてこるが、奥から甲高い女の…

「あ…つあ…」

壁の声が聞こえた。

「アーリー」は「アーリー」

あの女の声。  
アリ：の声。

「だい…すき…だいすきだよ…つゆう…つ

吐き気がした。

あたしは、玄関で座り込んでしまつた。

立ち上がりない。

ニルノトキニ

「アレニウス」

悠。

その名前を呼ぶのは、あたしだったのに。

「だい…すき…」

あたしの方が、ずっとずっと大好きなのに。

「…ひ愛してるよ…」

一度も言えなかつた言葉。  
これから先も、一度も言えない言葉。

ねえ悠。

もし、幼なじみじゃなければ…

もし、家族ぐるみの付き合いをしていなければ…

もし、あんなに近くにいなれば…

もし、ただのクラスメイトだったなら…

もし、全く違う出会い方をしていたなら…

あなたに抱かれ、  
愛されていたのは  
あたしだつたでしょ…

あなたの傍で、  
笑いあえたのでしょうか。

もし  
：

【完】

(後書き)

疲れたら（。 。 ）1時間ちょいでぱーっと書き上げました。この作品は、大人の都合で子供苦しむ事つてよくあるなーと思つて書きましたあと、「届かない愛」つてのもテーマでしたね。本当に自覚あるくらい駄作ですが、感想等頂けたら幸いです（・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4885d/>

---

if...

2011年1月19日21時19分発行